書評

原田信之著『陰徳のひじり　玄賓僧都の伝説』

中根千絵

原田信之氏により玄賓僧都の足跡を伝説中に辿った本が出版された。玄賓僧都への拘りは、本書のなかで言及されたように、原田氏提唱の『今昔物語集』法相宗成立説に関わるものであり、『今昔物語集』が法相宗成立であるとするなら、法相宗の玄賓僧都説話がそこに収載されなかったのはなぜかという疑問から出発している。本書のなかでは、玄賓僧都説話が多く生み出されたのが『今昔物語集』以降であったからではないかという一応の結論を見ている。その是非はともかく（というのも玄賓僧都のような都を離れ、市井に隠遁した僧の話としては、天台宗の増賀、空也、浄蔵の話があり、社会事業を行った僧の話としては、本書にも登場する行基や役の行者の話がある。玄賓僧都説話の有する話のモチーフは、すでに成立していて、なおかつ、『江談抄』に大僧都を辞退した逸話は語られており、もし、『今昔物語集』が法相宗圏内で成立したとするなら、『今昔物語集』が好んで収録したそのモチーフに似つかわしい玄賓僧都がそこに交代して入る余地はなかったのであろうかという疑問を感じるからである）、本書は、方言で語られる玄賓僧都伝説の語りを地元の人たちから聞き取ることを通じて分析が行われており、それは、長年、口承文芸に携わってこられた原田氏の卓越した聞き取り能力によって成り立っている。そこには、文献では継承されえなかった玄賓僧都の話がいきいきと採録されており、岡山県を中心とした玄賓僧都伝説の宝庫となっている。

本書は、最初に玄賓僧都に関する事跡を古記録と説話集から抽出した資料をもとに確認を行ったうえで、そこには見られない出生に関する伝説、隠遁した地での伝説、墓所が存在する終焉の地の伝説を語りの採取された場所と伝説の内容の分布を呼応させる形で構成している。初出の年代順と本書の構成順を変えているが、初稿をそのまま生かすという方針に基づいているために、ページを順に繰っていくと、やや情報が不足していたり、何度も同情報が繰り返されたりして若干、読みづらい憾みがある。以下、本書の内容を整理しつつ、評を行っていく。

玄賓僧都は、『僧綱補任』によれば、河内国の人であり、天平六年（七三四）に生まれ、弘仁九年（八一八）に八十五歳で亡くなった人物と記されている。また、弘仁五年の項に備中国湯川山寺に遁去したことが記されている。『類聚国史』弘仁七年条には、備中国哲多郡に住んでいたと記される。『元亨釈書』においては、伯州（伯耆国）の山に隠遁した旨が記されている。また、玄賓僧都に関する説話は、『江談抄』に大僧都を辞退した話が初出としてあり、『発心集』第一話、第二話に三輪川の草庵に住んでいた折、大僧都を辞退して遁世逐電した話が載せられ、逐電後、北陸道と伊賀国で渡し守や馬飼いをしている姿が目撃された話、巻四に不浄観をもって女人への心の乱れを抑えた話が語られ、その他、『閑居友』、『古今著聞集』、『撰集抄』等、多くの説話集でその陰徳の姿が描かれる。但し、そこには、備中国（岡山県）での逸話はまったく見られない。

中央の記録や高僧伝では、河内国の人とされた玄賓僧都であるが、岡山県旧北房町（現在の真庭市）には、玄賓僧都が生誕したとされる場所と臍の緒を奉納したとされる臍帯寺が存在する。この地は、白鳳期に政治的中心であった場とされ、原田氏はこの地ならば、玄賓僧都誕生伝説が生まれてもおかしくないとする。また、臍帯寺の行基開基伝承は、備中国に訪れた玄賓僧都により創られたものであった可能性を述べている。

玄賓僧都の伝説をどう捉えるか、どこまでを史実と絡めて捉えるかについてであるが、本書で示された「伝説」の定義は、「特定の土地にある具体的な事物と直接結び付いて、その内容が真実と信じられてきた話をいう」ものであり、原田氏は伝説が真実とは限らないことを認識しつつ、時に、逡巡しつつもその土地に玄賓僧都の伝説が伝わっている事象そのものを重視して、伝説の流布した土地の特性からそこに一定の史実との関連を見出す形で論じている。ここで、評者が気になったのは、現在まで、同地に玄賓僧都の伝説が伝えられ続けているということである。全国的に行基や弘法大師の話は、メディア等でも採りあげられ、耳にも馴染み深い。それに比して、全国的には、玄賓僧都の名はマイナーであるといっていいだろう。たとえば、その時代の要請にあわせて、有名な人物へと逸話の主体が移っていく例として、浄蔵から弘法大師へと転換する例を評者は知っている。モチーフが同じならば、知られた人物へとコード変換が行われても説話上は問題がない。玄賓僧都の名が行基や弘法大師にコード変換されなかったのは、どういったことによるものであろうか。なぜ、玄賓僧都の伝説は伝え続けられてきたのか。薬草や石灰石の病気平癒の印象の強さが語り伝えられてきた理由であったのか、『元亨釈書』や『発心集』の説話の受容により、寺院から地域に住む人々に語り続けられてきたことが原因なのか。

医事説話を扱う評者としては、薬草や温湯や薬石に関わる多くの玄賓僧都伝説が口語りにより伝承されてきたことは意義深く思われる。原田氏は、桓武天皇に石鍾乳を薬石として献上した玄賓僧都の伝説を挙げ、『僧綱補任』に玄賓僧都隠遁の地とされた湯川寺周辺が石灰の地であったことが玄賓僧都が重用された理由の一つではなかったかと史実と関連づけて推測している。石鍾乳については、玄賓僧都と同世代の詩人・政治家である柳宗元がその効能を「與崔饒州論石鍾乳書」（巻三十二）において、胃腸に良く、寿命を延ばし、健康で心平らかにすると述べ、医書である『外台秘要方』第三十七にも弱った足腰を治癒し、気力を強くすると記されていることが確認でき、珍しい石鍾乳を薬石として使う知識をもつ玄賓僧都が隠遁の地においても宮中においても尊崇され、その名が喧伝されたと考えれば、それも納得しうる。その他、記録に記述のない玄賓僧都の終焉の地が矢掛町に伝承されるのは、原田氏が論じるように史実である可能性も高いであろう。また、伯耆国阿弥陀寺の場所を賀祥と確定したのも手堅い論証の上の結論で納得できる。

難をいえば、寺社と街道との位置関係をさらに詳しく論じる視点があれば、伝説を収集しえた場所が語りの伝承圏なのか、玄賓僧都の実際に移動した場所なのか判明する点もあったと思われる。後考を期したいと思う。

（二〇一八年六月一七日　法蔵館刊　二七三頁　二六〇〇円）